

彙報

○京都帝國大學文學部史學科本

年度講義題目

正科 目

國史

普通 西田教授 國史概説(第一部)

中村(直)助教授 國史概説(第二部)

特殊 西田教授 日本近世文化

牧 教授 日本法制史

藤 助教授 鎌倉時代史

喜田講師 中世の學問・思想

牧野講師 古代史の特殊問題

宮地講師 桃山時代の土地制度及村落

出雲路講師 神祇史

演習 西田教授 祭祀の研究

普通 東洋 東洋史概説(第一部)

那波助教授 東洋史概説(第二部)

特殊 羽田教授 東方に於ける胡人の活動(隋唐以後)

那波助教授 五代の文化史的考察

鴛淵講師 清初八旗制度考

石濱講師 歐洲に於ける東洋史學の發達

田村講師 契丹史

森 講師 支那歴史地理研究法

演習 羽田教授 東洋史の諸問題

西洋 史

普通 原(隨)教授 西洋史概説(第一部)

時野谷教授 西洋史概説(第二部)

特殊 時野谷教授 グラッドストンの愛蘭統治策

原(隨)教授 希臘政治思想史

鈴木講師 中世後期の社會

井上講師 羅馬帝政確立期の社會

演習 時野谷教授 第十九世紀西洋政治史上の重要問題

原(隨)教授 プルターク英雄傳

普通 原(隨)教授 史學研究法

地理 學

普通 中村(新)教授 地理學通論(第一部)

小牧助教授 地理學通論(第二部)

特殊 小牧助教授 地と人

小野講師 地圖學

室賀講師 日本地理書解題

森 講師 支那歴史地理研究法

(四〇)

演習 小牧助教 地理學の諸問題 二  
實習 小牧助教 地理學實習 二

考 古 學

普通 濱田教授 考古學通論 二  
特殊 濱田教授 東亞上代の美術(前學年の續き) 二  
梅原助教 日本考古學 二  
水野講師 北方亞細亞考古學 二  
濱田教授 先史考古學の諸問題 二  
梅原助教 實習 考古學實習 二

副 科 目

國 史

中村助教 日本古文書學概論 二  
柴田講師 日本史料講讀 二  
柳田講師 民間信仰と慣習 (110)  
東 洋 史  
羽田教授 東洋史籍講讀 1  
那波助教 同 1  
西 洋 史  
時野谷教授 Ranke: Ueber die Epochen der neueren  
Geschichte 講讀 1

地 理 學

小野講師 獨逸地理學講讀 (110)

室賀講師 佛蘭西地理學講讀 一

考 古 學

濱田教授 考古學英書講讀 二

人 類 學

金關講師 人類學概論 (115)

教 育 學

長田講師 教育學概論(哲學科講義) (40)

美 術 史

源 講師 鎌倉時代の美術(哲學科講義) 二

佛 教 史

禿氏講師 平安朝以後の日本佛教史 (哲學科講義) 二

英 語

中西講師 Norman Foerster (ed.): American Critical  
Essays. 二

Ashton 講師

Sonokawa (ed.): Modern English Literature 二

獨 語

石川講師 高森純夫: Kurzgefasste Grammatik mit  
Lesebungen 12. Käsner: Finkchen und Anton 二

雪 山 講 師

K. L. Immermann: Der Oberhof. 第一回 二

雪 山 講 師

K. L. Immermann: Der Oberhof. 第二回 一

石川講師 Thomas Mann : Geheimnis der Seele (Aus „Der Zauberberg“) 第二回 一

佛 語 高木直明 初等フランス文典 第二回 一

伊吹講師 Anatole France : Le Crime de Sylvestre Bonnard 第二回 一

希臘 語 Tanaka : (Graece Grammaticae Rudimenta) 第二回 一

田中教授 Xenophon : Cyropaedia, Book I & II. Homeros : Odyssea, VII-XII. 第二回 一

波多野教授 Platon : Phaidon 第二回 一

田中教授 Aiskhylos : Prometheus Vinculus 第三回 一

羅 匈 語 Tanaka : Nova Grammatica Latina 第二回 一

Morfon : Legends of Gods and Heroes. Caesar : De Bello Gallico. Book I. Cicero : De Senectute. Vergilius : Aeneis, Book I. 第三回 一

田中教授 第二回 一

支 那 語 岡本正文 支那語教科書 第一回 二

徐 講師 老舍駱藻集 繙譯須知 卷二 第二回 二

傅 講師 孟于 元曲選 繙譯須知 卷三 第三回 二

露 語

十時講師 Yasugi : Grammatica roos. 第二回 二

伊 語

黒田講師 伊語初歩 第二回 一

○史 學 研 究 會

例會 昭和十二年五月八日(土曜)午後一時半より文學部史學科第一教室にて左の二講演あり、午後五時前散會。

一、初期の莊園に就いて 赤松俊秀氏

初期莊園に就いては、從來一般に土地は墾田に始まり、開墾及び耕作に要する勞力は浮浪人から求め、専任の莊民があり、從つて經營は所有者の自營であるのが本態であるとせられてゐる。勿論それに對應する史料は存するのであつて、論者はこれを以つて直ちに奴隸使用に依る西洋のラティフィンディウムに比定するのであるが、當時の社會構造全般に考察を及ぼし、關係史料を精査すれば、初期の莊園は、むしろ公田の如き賃租田を本態とし、専任の莊民は未だなく、公民の勞力の剩れるものを吸收して小規模に經營されたと觀るべきである。莊民の發生はその次の段階であつて、莊民は調庸又は臨時雜役が免ぜられ居り、そこに莊園の所有者がより大なる利益を收める餘地が見出されたのである。浮浪人を使用した場合の莊園はまさにこれ

に對應するものと考へられたのであるが、奈良朝及び平安朝初期に於いては、尙浮浪人は調庸を輸するのが通態であつたから、浮浪人に依る莊園がすべてこの段階に屬するとは云はれないのである。耕作者の調庸が免ぜられた時の莊園に構造は如何なるものと云ふに、現存の史料ではこれを徴し得るものは見出されないのであるが、只公營田が一應耕作者の調庸が免ぜられた形式になつてなり、その構造が元興寺領近江國依智庄に見られるものと相通するところより云へば、或は依智庄の如き構造がそれでないかとも考へられる。依智庄に於いて特に我々の注意を惹くものは佃であるが、それが公營田の調庸を免ずると云ふのと相對應するものであるとすれば、莊園内に於いて佃の發生は、從來考へられてゐる如く、その土地の氏族制時代に溯る歴史的關係、又は莊園所有者の自營に基くとするよりは、平安朝前期より顯著になるこの莊民の發生と最も深く關聯するものと見るべきである。

莊民の調庸免除が平安朝前期より現れて來たのに就いては、その第一段階は、莊園の所有者よりその經營を委任されてゐる莊長が、その實力に依り國郡司の徵收を拒否したことに在る。このことは深く注意すべきであつて、當時の莊園經營の中樞が奈邊にあつたかと思はしめるものである。莊長は在地の有爲者を擧用したと思はれるが、在地の統制者が出現し、それが耕作者としての農民を監督したことは當時の所謂農民層に於いて文化受容上二つの分裂があることを思はしめるのである。この

分化は困難なる莊園經營を可能ならしめたのであり、引いては武士の出現を生んだのであるが、その由來するところは舊氏族制時代の氏土と氏人との分立にあるとするよりは、大化改新に依る大陸文化の輸入と觀るべきである。その意味に於いて大化改新の歴史的意義は極めて大なるものがあるのであつて、班田制以後、一つの社會發展として莊園制乃至封建制の時代が現れたのは、これに依つて始めて理解される。云々。

#### 一、北支那石窟論

水野清一氏  
(本誌掲載の豫定に付き省略)

例會 六月十二日(土曜)右同所にて開催

#### 一、支那の縣名に就いて

森 鹿三氏  
(本誌掲載の豫定に付き省略)

#### 一、歴史的眞實と藝術的虚偽

土井虎賀壽氏

一般に藝術と眞實との關係が初めて問題となり得るのは、Worringer の所謂「古典的時代」に於てである。

原始人に於いては、自然は自己と敵對關係に在るものとされ、彼等は自然に對して *hellsche Schick* を抱く。かゝる態度より生れる藝術は、*Mempher* であり、單に *Symbol* を捉へんとするものに他ならない。こゝに於いては、現實から游離するところに藝術の意味が存するのであるから、従つて存在をとりへると云ふ意味での眞實なるものは最初から全然問題となり得ない。斯くして、藝術と眞實との關係が初めて問題となるのは、自

然の撰寫 *missis* を目的とする古典的藝術に於いてである。従つて藝術的虚偽と歴史的真實との交渉が問題となるのもまた、こゝに始まることは云ふまでもない。

さて、一般に眞實とは何であらうか。Wahrheit の考へ方も勿論歴史的に變遷する。

一、ギリシアでは Aletie (= Entdecken) と考へられた。

二、撰寫說 (Ueberensinnung von Sein und Denken)。

三、キリスト教の啓示 (Offenbarung) の思想、及びカントの理性構成說 (Konstitutionismus)。

四、ヘーゲルの Totalität の思想。

ヘーゲルに於いては、全體的なものが眞であるかと考へられてゐるのであるが、今このヘーゲルの思想を時間に關係させて考へてみよう。

ベルグソンによれば、過去が膨れ上つて現在を胎み、現在は更に未來に向つて歩みを續けると考へられる。かゝる時間は或る意味に於いて全體を掴んでゐる。それは、全體的時間である。三者は直接的に關係し、相互に durchdringen し合ひ、然もその方向は一つであり、一義的である。

之に對して、或る反省が加へられると、時間に對して次の如き二つの態度が生れる。第一に、現在に對して同感を有し得ず、或は現實に生きること耐へ得ずして、過去に逃避し、過去を理想的なものとする態度。物語風歴史は、多分にかゝる要素を含むものである。併し、第二に、これと正反對の態度がある。

それは、未來へ進まんとするその手がかりとして過去を見んとするものであつて、こゝに於いては現在ののみが問題である。これに於いては現在のために有用なもののみが蘇らされ、現在の立場からのみ過去が捉へられるのであるから、過去は過去として眺められない。即ち、pragmatisch な歴史敘述がそれでありニイチエの所謂 monumentlich な歴史がこれである。

この二つの態度は、共に全體の立場に立つものではない。前者は過去にのみ生き、後者は現在にのみ生きる。然らば、如何にして全體としての歴史が要求されるのであらうか。

吾々が現在に満足し得ず、何か新しいものを生み出さうとする時、吾々に重荷として感じられるもの、吾々の自由を縛るものがある。それは過去からの文化・制度である。吾々はこれらをはつきり見極めようとして過去をふりかへる。即ち、過去への Relation によつて未來を創造せんとするものである。これが反省を含んだ全體の態度であり、ニイチエの云ふ批判的歴史である。けれども、此の場合、未來を建設せんとする態度を以て過去をふりかへるならば、それはさきの pragmatisch な歴史に過ぎないであらう。それ故、過去は必ず過去として捉へられねばならぬ。此の時、ニイチエの云ふ永劫回歸の思想が吾々にとつて示唆的であらう。未來を創らんとする望みが強ければ強いだけ、吾々は一層強く過去を過去として見つめねばならぬ。ニイチエは、唯未來を創造せんがためにのみ、永劫回歸の思想を説いたのであつた。

こゝでランケの考へに就いて云ふならば、彼の「夫々の時代は直接に神のもとにある」と云ふ有名な言葉は、決して普通云はれる如き metaphysisch な意味を有つものではなく、positivisch なものである。彼はこの言葉に續いて「各々の時代から如何なるものが生れ来たかと云ふこととは獨立に、夫々の時代は各々特有の價值を有つ」と云つてゐるのである。

夫々の時代が、それに特有な意味を有つものならば、現在の立場に立つ我々は、過去の諸時代をそのものとして捉へ得ないのではなからうか。そこには、切斷がある筈である。ランケは、このことと關聯して「歴史家は個々の事實そのものに喜びを覚えねばならぬ。そしてその相互の間の意味聯關を wahrnehmen しなければならぬ」と云つてゐる。こゝでランケは wahrnehmen と云ふ言葉を用ひてゐるが、もしこれの代りに デイルタイの云ふ如き理解 verstehen と云ふ言葉を用ふるならば、それは妥當ではなからう。しかし、デイルタイの云ふ verstehen とは如何なる構造をもつ概念であらうか。

デイルタイに於いて云はれる理解とは、Ausdruck を以て一度 das Innere へかへすことに外ならない。そこに於いては、内なるものと外なるものとの Dualismus が前提されてゐる。外なるもの、物質的なものには、直接内なるものが含まれてゐない。そこで今一度内にかへつて、それを感ぜねばならぬと云ふのである。

しかし、この外なるものを再び内なるものにかへすことは、

一體如何なる手続きによつて可能であらうか。それはリップスの云ふ如き感情移入 Einfühlung による他はないであらう。物質は飽くまで物質であり、精神内容を含むものではない。外なるものを再び内なるものにかへすとは、そこへ自己の感情を移入し、これを精神化して眺めることに他ならない。斯くしてデイルタイの云ふ理解は、Einfühlung を前提とするものである。けれども、Einfühlung がなされるためには、對象と自己とが他人であつてはならぬ。故に、それは結局自己を對象に押付けることとなるであらう。

然し乍ら、ランケの云ふ如く、各々の時代が夫々特有の意味を有つものならば、現在の吾々は、かへつてそれから教へられねばならない。本来、外なるものと内なるものとは別々のものではありえない。Ausdruck そのものによつて das Innere が存するのである。従つてそれは、Einfühlung によつて捉へられるが如きものではない。それは、直接的に wahrnehmen されねばならぬ。デイルタイの verstehen は、眞實を捉へるものではない。歴史が各個性的な夫々の時代から成り立つものであるならば、そこには Einfühlung は不可能であり、それは唯、直接的な Wahrnehmung によつてのみ把握されることが出来る。

ところで、獨逸人の傳統的な考へ方によれば、Wahrnehmung は、次の如き構造をもつと云はれる。

一、Empfindungsdaten,

二、Raum und Zeit,

三、intentionaler Akt od. objektivierender Akt,

この第一、第二によりて Vorstellung がつくられ、第三によりてこれが外に表出されると云ふ考へである。

かゝる考へ方の根本は、結局 Vorstellung を中心とするものであつて、事實を無視した抽象的理論構成にすぎない。現在のゲシュタルト心理學の證明するところによれば、斯くの如き抽象論は成立しない。此の説に従ふならば、Wahrnehmung と hallucination との區別を考へることが出来ない。Wahrnehmung は、Traum に等しいものとなるであらう。

フランク、Traum 卽 Wirklichkeit との關係が問題となつてくる。ヘラクレイトスの言葉に、「夢みる人は、私の、個々の世界をしか有たない。目覚めてゐる人は、共通の世界を有つ」と云ふのである。此のヘラクレイトスの思想は、次の如き意味に於いて理解される。

一、Umfang の意味に於いて、

二、Gehalt, Struktur の意味に於いて、

第一の場合に就いて云ふと、目覚めてゐる世の世界はすべて聯關を有ち、一つの世界にまとめられる。之に反して夢の世界、夜の世界は System を有たない。歴史家が歴史的世界、現在の世界までの連關を辿るのは、斯く外延的に目覚めの世界を連結することに他ならない。次に第二の場合に就いて云へば、目覚めてゐることば、魂が肉體を支配する時であり、吾々が外界に

對して或る Orientierung を有つことである。即ち、外界に對

して或る態度決定をなし、その態度を以て物を知覺することに他ならない。藝術家の創作は、斯くの如き意味での目覺めを興へるものである。例へばギリシア悲劇の作品の目的は、觀る者にカタルシスを起させ、恐るべきものに對する同情と恐怖とによつて、更に生きぬくべき力を興へることである。ニイチェもギリシア悲劇を解釋して *Sinke des Pessimismus* と云つてゐるが、これは、最も恐るべき運命との摩擦によつて吾々の動かぬ力を起させることを云つてゐるのである。即ち、それは、先に云つた目覺めを最も強く促すものであり、絶望を通して新しい心構へを起させるものである。このことをヘーゲルは「人生の眞實は *Heinrich Spieß* である」と云つてゐる。云々。(抄録)

(文責中山)

○讀 史 會

新入學生歡迎會 五月十一日夕、於南禪寺天授庵。

○國 史 學 會

春季大會 六月二十二日(土)午後一時より樂友會館に於て開會、講演に關係あるものを中心として一遍上人繪卷四卷、(京都市、市比賣金光寺藏)大御記(内一卷、自筆本)永昌記(以上勸修寺伯耆家藏)馬降自筆書狀(東大寺圖書館藏)後柏原天皇女房奉書、宗繼入道隆佐記、信長下知狀、道家祖君記(以上立入宗光氏藏)其他淡川神社關係の繪圖、文書等多數展開されたが講

演者及演題は左の如くである。

一遍上人の思想に就いて

近世後期の文學に就いて

徳川幕府の宗教政策

平安末期の氏寺について

第二の維新

湊川神社創建事情に就いて

武家故實の社會性

大府記に就いて

午後六時盛會裡に閉會した。

### 民俗學界六月例會

六月四日、午後六時半より樂友會館第一號室に於いて開催、

柴田講師、池田、藤井、原山等先輩諸氏並びに學生多數來會。

一、宮座調査報告

二、同

高谷君の調査は紀州伊都郡偶田村八幡の中世に於ける姿を高山山文書に依つて考證された研究の發表である。

野山君の調査は江州甲賀郡太羅尾村に於ける宮座の現地調査

の報告であり、同君彼地に在つて舊代官太羅尾家の特別な援助

の許に調査を進められたものであるだけに、其の精密なる研究

發表は大いに傾聴すべきものがあつた。

三、神社調査要目

柴田 講師

神道論の漸く喧しく言はれる時、神社そのもの、在り方から其の本質の一端を視はんとする意圖の許に作成された神社調査要目の解説を爲されたものである。

四、十六ミリ映寫

北原能野神社田樂並びに頭渡式

矢代日吉神社田樂

○國史教室春季研究旅行記

京都帝國大學史學科國史專攻學生の春季研究旅行は五月廿九

三十の兩日を期し、岡崎、名古屋方面に定められたり。名古屋

地方は、前に昭和三年度に於て行はれたる故、今回は岡崎市を

中心とし、名古屋方面を附け加ふ。

一行は、藤、出雲路、柴田三先生の指導の下に、田中助手、

大學院學生、學生、總員二十七名を算ふ。

第一日(五月廿九日)

此の日早朝より陰曇、降雨の雲ひあるも、午前八時四十九分、

勇躍、京都驛を發す。懸て展く模糊たる湖畔の春景、また聳ふ

る方もなく、左窓に彦根の城を見遣りて伊井氏の權勢を想ふ。

大垣を過ぐる頃、空晴れて兩窓の風景次第に輝きを加へたり。

同十一時五十八分、名古屋驛着。直に徳川園に向ふ。この地

もと徳川家邸宅たりしもの、二代藩主光友誕生當時の建物たる

清流軒は東北丘にあり。庭園のもつ風格氣品に車中の疲を癒し

更に東に隣接せる徳川美術館を見學。藩祖義直備學獎勵の遺物

たる聖像類及び「先聖殿額」、狩野常信筆「織田信長像」、傳岩佐



又兵衛筆「京名所繪屏風」、徳川家康より義直に贈れる名物茶壺（銘夕方）、今川義元のその子氏眞に對する「異見狀」、殊に岡崎圖書館にて、と期待せる岡崎圖書館所藏の南蠻屏風等の逸品に接す。

午後三時、熱田神宮着。春敵門を入れば、一變して神々しき神域なり。御手洗にて身を淨め、謹みて神の御前に額づく。明治廿六年、寶劍と五座の神々を相殿になされ、又、神殿も伊勢神宮に倣ひて御改築になり、従前のものと全く異なる形式に就き出雲路先生より謹話を拜聽、それより寶物館を拜觀す。

有名なる「金銅兵庫鎖太刀」、「春敵門額」を始め、古文書、古筆には「後花園天皇宸筆神領寄進狀」、治承四年八月の「源賴朝神領寄進狀」、「織田信長書翰」、「加藤清正より惣檢校への返書」、熱田神宮の社家たりし「馬場家古文書」、「菅原道眞筆般若心經」、永和三年殿阿上人の寄附せる「日本書紀（十六卷）」等その主なるものなり。次いで神官の御案内を得て土用殿を拜觀、それより羽城町の加藤景美氏邸に赴く。當家は一に東加藤氏と稱し、美濃岩村の城主加藤景廉の裔にして鎌倉時代以來連綿として繼げり。夙に天文年間今川・織田兩氏抗争の犠牲となりたる竹千代を三年間養育せる故、徳川氏と所縁深く、かゝる由緒によりその藏する所の古文書、古記録は安土桃山時代は勿論、江戸時代に及べり。一行は先づ家庭幽居地跡を參觀後、是等文書類の見學を希望すれど恰も當家取込中にて其一部に過ぎざりしは遺憾なりき。即ち拜見に及びしものは織田信長書狀一通、家康書狀

三通、家康の御室お龜の方（志水宗清の女）自筆の假名消息及び桶狭間の役に熱田神宮社前にて信長より拜領の盃等なり。

當家の特別の御配慮に謝しつゝ、其所を辭し、徒歩數分にして舊東海道に出て裁斷橋趾に到り、欄干に附されたる擬寶珠の銘文を觀る。擬寶珠は四箇現存し、その中一は假名文、三は眞名文にて記せるも、是等を讀みて特に吾人の心を穿つものは西南隅の假名文の銘にして、その作者たる堀尾金助の母なる人の切々たる親情は何時の時代にありても讀者の心なうつ。限り無き追想一瞬にして街の喧騒に破れ、西の方、雲紫に染むる頃吾人は第一日最後のコースたる白鳥陵に急ぐ。

白鳥陵は堀川の下流に臨み、斷天山古墳等と共に一の古墳地帯をなす。庄内川を中心とする洪積層地帯の尾張平野が岡造時代に如何に重要性をもてるものなるか、加之、其處に散在せる古墳が前方後圓の形式に於て前後の括れ目に造出のあることな以て近畿地方の陵墓に類似性をもてること等、多く考察を加ふ可きものありたり。

#### 第二日（五月卅日）

名古屋驛發午前八時十五分。豐穰なる麥の穂は大きく緑の波を打ち、初夏の爽風またなく快し。午前九時六分岡崎驛着。バスにて東岡崎に至り市立圖書館を訪ふ。柴田館長の御厚遇を受け、「東照公日課念佛六萬遍」を始め、副札、及び三河に於ける今川氏、徳川氏關係の古文書寫眞の蒐集せられしものを見、坐して縣下散在せる文書を一覽するを得しは甚だ好都合なり。館

長の御案内にて更に、岡崎城天守閣に登る。元和年間本多豐後守康紀の築きし天守閣は明治六年に破毀されたりと雖も、西郷彈正左衛門調頼以來、家康等代々の城主、修營の跡は遠く西方矢作川を隔てて碧海の平野を見渡す巍然たる城巖に於て察するに難からず。城内緑深き楓の梢間に龍城神社あり。數多の寶物中、家康公畫像一幅、家康書狀一通、田町市免許狀（慶長十四年九月十七日家康黒印）等顯著なるものなり。

附近の社寺總て古文書を所藏す。市の東方小猿塚に新に移されたる總持寺、又その代表的なるものなり。寺傳に據れば始め天台宗にて建保二年本間三郎重光の創立とか。代々足利氏の女入りて尼となり、後、公卿の女これに代る。幕末に至り光格天皇、孝明天皇より繪旨を賜りたりといふ。現在は曹宗にして僧寺なり。一行の爲めに陳列されたる文書廿餘通、足利尊氏寄進狀二通、足利尊氏安堵狀（九月晦日）、通、足利直義下文觀應二年五月廿一日）、足利義隆寄進狀三通、足利義滿寄進狀（應永六年九月二日）、その他仁木義長書狀、いなるの女房宛讓狀（永仁四年三月一日）、高師秀書狀（文和四年十月八日）、足利義景書狀應永三十年四月十一日）、等にして、特に尊氏の總持寺寺領に關する安堵狀は最も興味を惹けり。歸途、豫定外の滿性寺に立寄り、切迫せる時間に更に古文書數通を拜見す。松平親忠寄進狀（明應五年七月十五日）、阿廣忠書狀（天文九年三月五日）、今川義元書狀（天文廿一年十一月晦日）、殊に十詠和歌と共に

近衛前久公の自筆たる十一月七日附滿性寺宛の書狀は信長の死當時の本龍寺と近衛家との關係を示す好適の史料として注意されたり。

地方に散在せる數多古文書類に親しく接し得たる満足と喜悅に一行は歩調も輕快に河畔の松並木道を一路驛へと急ぐ。

岡崎驛發午後二時三十四分。途中、再び名古屋にて下車。直に自動車に分乗、大須文庫に向ふ。御案内を得て鐵筋コンクリート造の文庫を參觀し、地階の閱覽室、總檢張二重壁の地下寶庫はその收藏設備の完璧に今更ながら感激の聲を忍び得ず。次いで方丈に導かれ、夫の最も有名なる國寶寶輪筆應安鈔本の古事記、並に國寶尾張國解文正中鈔本を拜觀し、本堂内陣參拜後約一時間餘にして同寺を謝辭し、近接せる七ツ寺を訪れ役僧の御案内にて本堂に入り國寶彌陀三尊、多聞・持國二天に拜禮す。内陣の傍に國寶一切經の經櫃置かれ、櫃蓋の表面には巧緻なる朱筆にて釋尊轉法輪の像を中心として十八像が書き、裏面に安元元年乙未正月二十日送之ことを記せり。薄暗き本堂を出づれば國寶本堂の礎に鳩夕日に映え居たるを仰ぐ。

茲に意淺深き二日の旅を終へ名古屋驛發歸洛の途につく。時に午後七時四十一分。

翻筆するに當り、各地に於て御多忙中特に御配慮に預りし諸氏の御厚意に對し衷心より感謝の意を表するものなり。

（羽田記）

○東洋史學談話會

第五十六回例會 五月二十六日(水)午後六時半、於文學部第一演習室。出席者約二十名。

王安石の銅禁解除

荒木 敏一氏

Tarikh-i-Katani 考

石濱純太郎氏

○支那學會

新入生歡迎會 五月十五日(土)午後一時半、於文學部第一演習室。出席者三十名。

定海方氏舊雨樓合肥李雲氏望雲帥堂藏漢石經に對しての

一考察 渡邊 幸三氏

○東方文化學院京都研究所講演會

公開講演會 六月五日(土)午後二時、於同研究所講演場  
華北俗曲について(レコード使用) 傳 芸 子氏

○西洋史讀書會

例會 昭和十二年度第一回例會を五月一日午後六時半より、二回生歡迎會を兼ねて、樂友會館にて開催。

本年度卒業生中、高山、石澤、小澤三君の卒業論文の發表あり、午後九時半頃散會。出席者 時野谷、原田教授、鈴木、井上兩講師を始め、二十六名。

例會 昭和十二年度第二回例會を六月十日午後六時より、樂友會館にて開催、左の二君の讀書紹介あり、盛會裡に午後十時半頃散會。出席者、時野谷、原田教授、鈴木、井上兩講師を始め、二十二名。

1. Adams, G. B.: Civilization during the Middle Ages.

二回生 吉川 潔君

1. Good, G. P.: English Democratic Ideas in the 17th

Century. 二回生 園 亨君

日本地理學會聯合講演會

四月三・四兩日にわたり本學工學部にて開催、本教室關係の講演者並にその演題は次の如し。

四月三日

田中 秀作 滿蒙聚落の植民地理的意義

三友國五郎 先史聚落に就いて

村松 繁樹 「松前廣徳の蝦夷島奇觀補註」について

藪内 芳彦 アラビアの旅行者と商人に就いて

四月四日

吉田 敬市 京都市近郊の條里と地割

神尾 明正 歴史時代に入つて起つた最後の大きな地形變

化の野外資料とその先史地理學的意義

島 之夫 大阪市の特殊景觀——特に問屋町に就いて

尙五日には小牧助教授、織田武雄、吉田敬市兩氏の指導により

京都近郊の土地利用並に歴史地理に關して見學あり。コースは御所・二條・丸物・桃山・宇治・山崎・西陣。

○地理教室春季見學旅行

蒜山盆地調査を主目的として小牧助教援引率にて二回生四名及び助手副手計七名六月二日出發、津山勝山湯本を経て目的地に入る。一帯に山椒魚の棲息地、碓藻土、中山葉(檜葉)を産し山陰山陽兩文化の交流を見る。大山寺に詣り米子より二隊に分れて山陰及山陽に途をとつて京都に着す。八日。

會報

○會員動靜

○入會

京都市左京區吉田中大路町三四、清盛館内

五來 重氏

(右) 田中達男氏紹介

滋賀縣甲賀郡寺庄村字寺庄

池田 正孝氏

(右) 柴田實氏紹介

東京市澁谷區永住町十四

大久保利謙氏

(右) 徳重淺吉氏紹介

兵庫縣豐岡町生田道一四五ノ二 竹村方

綿織 透氏

京都市伏見區深草中ノ島町二〇

仲野彌壽治氏

京都市左京區吉田下大路町五〇 田中方

草間 俊一氏

京都市左京區中區立賣通大宮西入

福井 明氏

京都市左京區吉田本町 靜修館内

六花 謙哉氏

大津市了徳町十一ノ一 原方

藤原利一郎氏

京都市上京區上長者町通新町西

川崎新三郎氏

中華民國北平米糧庫三另

原 八郎氏

京都市左京區淨土寺南田町一六一 銀閣寺アパート別館

今中 寛司氏

陳 授 庵氏

外山 齊氏

京都市左京區淨土寺馬場町一二〇 十田方

今井 桂二氏

京都市左京區夷川通川端東入

會田 雄次氏

京都市左京區北白川西町八 河波方

玉田 義美氏

大阪府北河内郡枚方町枚方四

竹田 聰淵氏

(右 前川貞次郎氏紹介)

○轉 居

愛知縣渥美郡田原町木町通 花屋方

天野 義壽氏

神戸市山本通四丁目一四一ノ一三

井川 定慶氏

廣島市幟町七四

栗田 元次氏

京城市明倫町四丁目九五 明倫莊内

渡邊 明成氏

臺南州立嘉義中學校

藤田 四郎氏

京都市東山區知恩院山内 繼志學寮内

羽田 秀典氏

福岡縣大牟田市外縣立三池中學校

松山 國義氏

京城市青葉町三ノ一一四

藤塚 隣氏

○退 會

友 枝 照 雄氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄

黒羽兵次郎著 大阪地方の船仲間

湯川 弘文社

武藤 長藏著 日英交通史の研究

著 者

宇野 柏里著 井 波 誌

著 者

横井 春野著 能楽全史(中卷)

わんや書店

史學雜誌 四十八ノ四、五、六

東大史學會

歴史地理 六十九ノ四、五、六

日本歴史地理學會

社會經濟史學 七ノ一、二、三

社會經濟史學會

史學研究 八ノ三

廣島史學研究會

人類學雜誌 五十二ノ四、五、六

東京人類學會

考古學雜誌 二十七ノ四、五、六

考古學會

文 化 四ノ四、五、六

東北大文科會

國學院雜誌 四十三ノ四、五、六

國學院大學

史迹と美術 八ノ四、五、六

史迹美術同友會

經濟論叢 四十四ノ四、五、六

京大經濟學會

社會學徒 十一ノ四、五、六

社會學徒社

國史學 十一、十四、十七、二十一、二十三、二十六、二十八、三〇

國史學會

史 學 十六ノ一

三田史學會

龍谷史壇 十九

龍大史學研究會

史 淵 十五

九大史學會

臺大文學 二ノ二、三

臺北大文學會

國民精神文化 二ノ四

國民精神文化研究所

史 觀 十一

早大文學部

民族學研究 三ノ二

日本民族學會

以可留我 一ノ四

鶴 故 郷 舍

皇 學 五ノ一

神宮皇學館

東洋史研究 二ノ四

東洋史研究會

歷史學研究 七ノ四

歷史學研究會

哲學研究 二十二ノ四、五、六  
鴨臺史報 五

普魯學會論集 三

日本大學文學科研究會報 四

考古學叢報 一ノ一

考古學論叢 五

善隣協會調查月報 五九、六〇、六一

史學消息 一ノ五、六、七

通報(Tung Pao) 三十三ノ一

Nankai Social & Economic Quarterly 十ノ一

Harvard Journal of Asiatic Studies 二ノ一

天津南關大學經濟研究所

Harvard-Yenching Institute

京都哲學會  
大正大學史學會

京城普成專門學校

日本大學文學科

考古學叢報社

考古學研究會

善隣協會

北平燕大歷史學系

ベリオ氏

前號「魏志倭人傳管見」訂正

行 誤

三國志魏志卷三卷三

北隣烏桓夫餘

九貉など

史漢二書に匈奴あり

烏丸鮮卑傳がある

倭志

倭志

魏志

夫餘王尉仇台

魏東

遼志

口辨

前漢一大郡

以弓擊水

見るところの

王欣

王欣

王欣

欣既に

はあるであらうけれども

であるとはいへ

三國志魏志卷三〇

北隣烏桓夫餘

九貉などと

史漢二書に匈奴傳あり

烏丸鮮卑傳がある

魏志

魏志

魏志

夫餘王尉仇台

遼東

魏志

口辨

前漢の一大郡

以弓擊水

見るところ、

王願

王願

王願

願既に

であるとはいへ

であるとはいへ